

若し夫れ、此の運動にして革命運動と変化し、資本主義制度の搾取掠奪に対し、根本的の斧鉞を加ふるやうなことがありとすれば、それは彼等の階級的運動を超越して、全人類の幸福、安全、自由のために、在來からの勞働階級、無産階級たる大衆の運動と合一した場合だ。

之れ無政府主義者の革命は階級闘争運動を超越すると爲す所以である。

三 法律と議會とは現支配階級に依りて、彼等の目的を達するため

に用ひられた。我々は何故に我々の目的を達成するために、それを用ゐることが出来ないか。

この問題は資本主義と勞働者の運動とが、本質的にその目的が相反するものなる事を考慮せないことから起る誤謬に基いて居る。若し兩者の目的が同一のものであるならば、同一機關、同一法律が役立つこともあらう。然るに資本家は益々

自分達の搾取を完成し、鞏固にし、維持しようとして居る。之れに反して、勞働者は彼等の支配、彼等の搾取から解放され、自由を獲得せんとするのだ。

斯様に相反する兩者が、何うして同一機關、同一法律を同じやうに役立つさせることが出来よう。ブルジョアが據りて以て、彼等の支配、彼等の搾取を完成し維持するために金城鐵壁とする所の政府と法律とが、其の支配、其の搾取から免れ、解放されんとする勞働者の運動に役立つべきゆゑはないのだ。

この問題の因りて来る所以は、政治と法律とは人類の幸福と安寧の製造元であり、自由と平等との源泉であるとの漠然たる迷信から來たものだ。チブスがはやる、ベストが流行する、取締らなければならぬ。法律を制定せよと云ひ、思想が悪化した、風俗が廢頹した、取締らなければならぬ、善導せねばならない。大に法律を制定する必要がある。

一に政治、二にも政治だ。そうだ、一に法律、二にも法律と、何んでもかでも

政治と法律だ。政治と法律とがありさへすれば、米も麥も將た豆も何にもかも、魔法使ひの杖のやうに一と振り振りさへすれば出て來でもするやうに。政府と法律とが承認さへすれば、惚れて居らぬでも夫婦で、淫婦淫夫でなく、賣淫關係ではないのだ。

斯る迷信の中に成長した政治家や社會主義者達は、一度普遍法が制定されたならば、我々無産階級は多數である。我々が目醒めさへすれば、議會に壓倒的の多數を占めることが出来る。そして政權は我々の掌中に落ちる。我々は其の權勢の力に依りて思ひ通りな型に社會を鑄直すことなど譯がない。

今の政府、今の議會は資本家の議會だから、我々の思ひ通りにならぬのだ。我々の政府、我々の議會となるならば、我々は思ひ通りの法律を制定することが出来ると思ふのだ。其の法律の結果として思ひ通りの社會が出来る。寔に、簡單至極なものだ。

斯くの如くして、社会的大変革さへも、一滴の血も流さずに、泰平無異の間に遂行すると思ふのだ。だがそれは夢だ。黄金時代はそう容易に來るものでない。

第一、法律に依りて型にはめられた社會は理想的のものではない。

第二、社會はそう法律に依りて型にはめらるべき筈のものではない。

彼の歴史に難いて居るギリシヤ、ローマの亡んだのは何うした譯だ。言ふまでもなく、彼等の社會があまりに型にはまり過ぎたからで、決して野蠻人のために滅ぼされたのではない。型にはまり過ぎて亡びない國民は未だ曾てないと言ふも過言でない。之れ必ずしも識者に俟つて知るに及ばない、三尺の童子と雖も少しく考へれば分る事だ。

蟹は甲羅があまりにかたくなつて、甲羅のために妨げられて、その發育がそれ以上出来なくなると、キチン質とやらの液を出して脱皮する。そして茲に新なる

生長を更始するさうだ。

政治や法律は人間社會に取りては外皮であり甲羅である。人間社會が政治や法律の型にはまつて、最早や其の發達進歩が出来ない時は、其処に一大変革を起して、其の發達、進歩を阻害する甲羅を脱皮しなくてはならぬのだ。そうでなければ、蟹が脱皮する事が出来なければ死ぬやうに人間社會も滅亡するに相違ない。然らば人間社會に取りてキチン質の液體は何んであらうか。彼の政治狂者の言ふやうに、一滴の血も流さず、泰平無異の間に行はれるものでないことは勿論のことだ。

斯様に、人間社會が政治や法律に囚はれて、一定の型にはまつた場合には、亡滅してしまふか、乃至は一大変革を行ふて脱皮しなくてはならない。だが、事實上人間社會は法律に依りて型にはめられるべきものでない。(法律に囚はれ、一定の型にはめられるやうな國民は一種特別な性情の所有主であるらしい。是の點に於

ては、日本民族は是の種に屬する分量を多分に有つてゐる様だ。)

人間の進歩發展は常に法律や政治の先きに先きにと進んで居るもので、法律や政治は其の進歩發達を後から承認するに過ぎないものである。時に馬鹿者があつて其進歩發達を阻止しやうとして、反動政治、反動法律を以てするものもある。だが、此の反動は古今東西を論ぜず、次第々々に進歩發達に途を譲らぬ譯に行かぬのだ。

頑固な強権主義者と雖も彼等が一大変革を行はんと欲する時は、憲法を中止し法律を蹂躪し、革命的手段に訴へることを承認することさへあるのだ。政府は何んでも爲すことが出来るとの生きた證據と思はれる現在の支配階級の徒輩は、實に彼等の欲する萬分の一も爲すことの出来ないものだとの生きた標本を我々に與へて居る。假令ば強盜、殺人、暴力團の横行、詐欺、横領、地震に火事、其他何と、日として傳へられない時がない。然も社會の表面に現はれないものに至つ

ては更に夥多しきものであるに違ひない。斯る市井の些事に於てさへ、政治も法律も殆んど何等權威のない有様だ。また東京市の區劃整理と言ひ、集團バラツク撤去と言ふ、東京市の勢力、復興局の威力を以てしても未だに行はれないのだ。それに何んぞや、人間社會の眞の進化發展を阻止することが出来るものでない。それ上述のやうに、政治と法律の威力のない事、価値のないことは明かだ。それが然かも現在の支配階級の徒輩がそれを被支配階級、被搾取階級に用ゐても尚且つそのものだ。然るに、それを以て、被支配階級、被搾取階級の徒が支配階級、搾取階級に向けて何んの權威があらう。何んの価値があらう。

四 人間生活には組織が必要だ。組織それは政府を意味する。然るに

無政府主義者は組織がない、それ故に其實行は不可能だ。

人間は社會的動物だ。既に社會的動物と云ふからは雜然と群生することを云ふ

のではない。必ずや組織のあることを意味する。たゞ其社會生活を爲すために我自身の自由合意で充分であり、且つそのみに依りて組織することが最も完全な社會組織であつて、法律の強制を必要としないと云ふのだ。

政府萬能の現代でさへ、我々の日常生活の九分九厘までは、否それ以上も政府なしに組織されて居る。そして法律の強制を必要とする時は、何時でも、何處でも我々の自由意志に反したことを行はせられる場合だ。

我々が集會を開いて居る。其秩序が整然として居るのは臨監の警官が居るためでは斷じてない。それは皆ある共同の目的、共通の利害を有つてゐるからだ。無理解な警官の爲め解散を命ぜられ、秩序を蹂躪することあるも、惟々として維れ命従ふ所以は、千金の子は盜賊に死せずと云ふ支那の諺に従ふからだ。狂犬に會ては一片の肉を抛けて其危險を避くるが賢なるためだ。

斯る場合は實に秩序を破るものは会衆でなく、警官其者であるとも云へる。

此所に二人の者があつて一室から他室にテーブルを移そうとする。其場合には彼等は必然にテーブルの兩端に廻つて運ぶに違ひない。そうするには何にも二人が一緒に一方に集まつてテーブルをひつくら返すやうなことをするなと政府の命令のある必要は毫もない。彼等は無言の裡に同意して其テーブルを目的の地に運ぶに違ひない。中すまでもなくテーブルを運ぶと云ふ共同目的があるからだ。

甲乙丙三人して旅行する。廣野に差懸つて、水を飲み盡して仕舞つた。水がなくて旅行所か死を待つ外にない。三人は水を求めに出懸ける。其中に誰れが見附けたとしても、與に共に其悦びを一にして相争ふやうな事はするものでない。それは三人が共同の目的を有ち、共同の利害を有つからである。

斯様に共同の目的、共通の利害を有つ所の社會組織に於ては、それが何のやうに複雑であらうと、同じやうに自由合意に依りて、圓滑に運行されて行くと云ふのだ。

石川五右衛門は『濱の眞砂は盡きるとも世に盜賊の種は盡きまじ』と歌つたやうな。今の世の人で十人が十人までこの歌を首肯せざるものはないやうだ。

馬鹿な！世に盜賊が盡きないとは何事だ。盗みする必要なきに盗みする奴が何處にあるものか。そんな奴は餘程の馬鹿か、氣狂に相違ない。世の常の人々で盗みするに至る所以は、其所に盗みすべき所以があり、盗みすべく出來て居るからのことだ。已に世に盗みする必要が存在し、盗みすることの出来るやうになつて居るから其種が盡きないのだ。

人類社會が相食み、相争ひ、相殺すやうに出來てゐて、それでこの世からあらゆる犯罪を取り除かうと云ふのは元來が太い了見違ひだ。如何程強力なる警察があらうとそれは不可能なことだ。

帝都の眞中に強盜が横行し、暴力團が跋扈する。それは『法律に缺陷があるのではあるまいか』と不思議がり、政府の力が足りぬからだと非難し、但しは道德

習慣が廢絶したのは政府當局の施設が悪いからだと思ふ愚者のある世の中だ。寔に困つたことだ。

一方には自分で使用もしない、又使用も出来ない多くの土地や財産を所有するものがあつて、他方には食ふものも、着るものも、乃至は住むべき家もないものがウヨウヨしてゐる。これでは、喧嘩も起らう、争ひもあらう。盗みもあらうぢやないか。それがなければ、却つて奇妙不思議であらうと云ふものだ。

已に、其源が濁つて居て其末を清うしやうとしても到底なりやうがない。是れ實に、百年河清を待つと一般、泰山を挟んで北海を渡るの類で、出来ない相談だ。之れ石川五右衛門輩をして傲語せしむる所以だ。

だが世には無理な人々が澤山あるので、こんな濁つた社會組織、こんな利害の衝突する社會組織を革めやうとしないのみか、之れを保持しやうと焦心、焦慮

して居る。是に於て、其所謂秩序、安寧を維持するために他の力を必要とする。

この必要として、我々は現在の政府を持つて居る。

先きに掲げた甲乙丙の旅行中の出来事のやうに、水を見附けた甲が、乙丙に向つて、この水は乃公が見附けたものだ、それ故に乃公はこの水の所有者だ、君達にして水が飲みたければ、否、死にたくないならば、今後は僕の荷物を持つて行け水も運べと主張する。

そして、そうさせるには何にか他の力を借らなければならぬ。神とか、鬼とか、但し猛犬とかの力を借りなければならぬ。そうしなければ、人のいゝ乙丙とても服従しやうがない。

無政府主義者は社會組織の悪いために、人間を悪化してはならぬと主張する。

社會は人々の利害の相衝突するやうな組織であつてはならぬ。社會をば利害の衝突することのないものにせねばならぬ。そうするのが無政府主義者の目的だ。

人々は皆共同の目的を持ち、其利害を共通にするに於て、協心戮力し、共同一致して共存、共榮を樂しむことが出来る。

人間の社會性を破壊するものは、この濁つた社會組織、この利害の衝突する社會組織である。この濁つた社會組織、利害の衝突する社會組織を革めて、共同の目的、共通の利害を有つ組織とすれば、自由合意を以て立派にやつて行ける。其所には法律の強制の必要は存在しないのだ。

因はれた人々は能く云ふ。それには先づ人間の頭から改造してかゝらねばならない、人間が皆聖人にならなくては駄目だ。

私達は云ふのだ。人間は皆聖人なんだ、社會組織の悪いために悪化され、惡化されつゝあるのだ。頭を改造せねばならぬのでない、社會を改造せねばならぬのだと。

尚ほ委しくは漸次に語る積りであるが、私は次の物語で此章を結びたい。

先年四月下旬、四國巡回講演の初、私は土佐から海路を伊豫の宇和島に取つた。前々からの疲労のため、ぐつぐつと寝込んで、深い眠りからさめた私は甲板に出て、心行くまで海氣を吸ひ、あたりの風景の美に打たれてゐた。

ふと、傍に若い娘の遍路さんと、中年婦人と二十一歳の青年遍路さん達の眞に仲の好さそうに話合つて居るのが眼に止まつた。私は其人々と語つて見たくなつた。

私は先づ、青年に向つて『あなた方は御同行ですか』とたづねた。すると、青年は生々した顔を上げて

『いいえ、私は一人です、この方々と途中で一緒になつたのです。私達遍路は途中で會つてすぐ同行のやうに仲好くなるのです。私は是迄度々遍路に出ますが、遍路程愉快なものはありません。』

青年は愉快其もののやうに愉快そうに語り出した。

娘さんもさも愉快そうに顔を上げた。

『遍路はこれまで少しも知らなかつたもの共が、すぐ兄弟のやうに、それ以上に仲良くなります。そしてお互に扶け合ひ、救ひ合つて旅を續けます。だが……』

と言つた、青年は聊か顔を暗くして、

『だが、この私も村に歸ればこの遍路の心持では居られません。遍路の心持で居たのでは生きて行けません。私も我利々々亡者にならなくてはならないのです。それがいやさに、私はこうして度々遍路に出たくなるのです。』

彼れは斯く語つて、世の有ゆる青年をば一度はこの遍路の生活をさせたらとの希望を述べ、續いて彼が

『全く知らない他人でありながら、旅に出れば扶け合ひ、救ひ合ふことが出来て、村に歸れば親しい村人の間、兄弟姉妹の間でさへも、扶け合ひ、救ひ合ふことの出来難いとは何ぜ?』

と疑問を出した時、船は宇和島についた。

私達を物色するウロンな眼は其所、此所に光つて居た。是れが是れ、安寧秩序を維持する所以の機關であるとよ。

五 人間は十人十色である、然かも完全でない、それ故に、行爲の規

準となるべき法律が必要だ。然らざれば世の中は置暗になる。

人間は十人十色である。其所にアナキズムでなければならぬ所以がある。

もし私達が、十人が十人とも同じやうな考へを持つて居るものとすれば、ほんに世話はあるまい。私達が一個の共通の法則を持つとすればそれに違はねばなるまい。だが、私達が十人が十人とも大概異なる考へを持つてゐるのだ。それなのに政府の力で皆な一様に行爲させやうとするから、茲に世の中が間違ひだらけとなるのだ。